

法政大学学術機関リポジトリ

HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

PDF issue: 2025-07-31

続々・日本の絵本を非日本語で読む：法政 大学大学院国際日本学インスティテュートで の試み

横山, 泰子

(出版者 / Publisher)

法政大学小金井論集編集委員会

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

法政大学小金井論集 / 法政大学小金井論集

(巻 / Volume)

10

(開始ページ / Start Page)

59

(終了ページ / End Page)

75

(発行年 / Year)

2013-12

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00009916>

続々・日本の絵本を非日本語で読む

—法政大学大学院国際日本学インスティテュートでの試み—

横山 泰子

I

日本の絵本が、近年多くの外国語に翻訳されている。そのことに興味を持ち、日本の絵本の翻訳版を並べて比較検討する授業を勤務先の大学院（法政大学大学院国際日本学インスティテュート 以下インスティテュートと略す）で実践し始めてからはや四年。インスティテュートの特色—日本人と外国人がともに日本研究を行う—を生かすべく、日本人学生と留学生が一緒に日本の絵本を読みあい、互いの文化について考察する授業を運営してきた。これまでの授業の概要については既にまとめたので⁽¹⁾、2013年度の担当科目「伝統文化と民衆世界I」を行いながら考察したことを記す。

今年度の受講生は、10名（日本人1名、イタリア人1名、中国人8名）であった。日本人教員である私と留学生たちの共通言語は日本語であるので、授業は日本語で行った。留学生には外国語に翻訳された絵本を渡し、テキストを日本語に訳し直すという課題を出した。例えば中国人留学生の場合、日本の絵本の中国語訳を読み、自分なりに日本語に訳して皆の前で音読し、翻訳の際に難しかったことや気づいたことを報告してもらった。そのあとで、私がもとの日本語オリジナル版を音読する。学生の日本語訳と、日本語オリジナル版には距離がある。学生の誤訳の場合もあるが、翻訳者の誤訳あるいは意識のために生じている可能性もある。誤訳や意識があったとすれば、なぜそうなったかを皆で考えた。また、文化の違いにより表現が変えられているケースも見られ、出席者全員で討論した。日本人学生には日本の絵本の英語版を渡し、英文和訳を課した。

実際に授業で扱ったのは以下の絵本である。

- 1 八島太郎『からすたろう』偕成社 1979年
英語版 Taro Yashima, *Crow Boy*, Viking, New York 1955
- 2 安野光雅『ふしぎなたね』童話屋 1992年
英語版 Mitsumasa Anno, *Anno's Magic Seeds*, 1999
- 3 あきやまただし『はやくねてよ』岩崎書店 1994年
中国語版 小然訳『快点睡覺吧』南海出版公司 2011年
- 4 宮西達也『カエルくんのみずたまり』鈴木出版 2007年
中国語版 朱自強訳『青蛙的水坑』接力出版社 2010年
- 5 いわいとしお『ちか100かいだてのいえ』偕成社 2009年
中国語版 刘洋訳『地下100层的房子』北京科学技术出版社 2011年
- 6 せなけいこ『めがねうさぎ』ポプラ社 1975年
中国語版 蒲蒲兰訳『眼鏡兔子』連環画出版社 2009年
- 7 五味太郎『くじらだ!』岩崎書店 1978年
中国語版 余治莹訳『鯨魚』河北教育出版社 2007年
- 8 たかどのほうこ『まあちゃんのながいかみ』福音館書店 1989年
中国語版 李穎訳『小真的长斗发』南海出版公司 2010年
- 9 林明子『まほうのえのぐ』福音館書店 1993年
中国語版 李穎訳『神奇的水彩』南海出版公司 2008年
- 10 松居直文 赤羽末吉絵『ももたろう』福音館書店 1965年
中国語版 猿渡静子訳『桃太郎』南海出版公司 2009年

教材を選ぶ際には、長く読み継がれてきた古典的作品と、最近刊行されて人気のある作品のバランスを考えるようこころがけている。1960年代から70年代頃に刊行された作品は、日本では親と子の世代で読まれているロングセラーであり、質が安定しているので教材に使いやすい。また、新しい作品には若者をとらえる現代的な魅力がある。

中国ではここ数年で日本の児童書の翻訳件数が急増しており、中国語に翻訳された日本の絵本を入手するのは難しいことではない。教材とした中国語の本は、いずれも2007年以降に中国語訳されたものである。今年度はイタリア人留学生が受講したため、急遽イタリア語版を入手するべく努力した。国立国会図書館国際子ども図書館『日本発☆子どもの本、海を渡る』によると、海外で翻訳された

日本の児童書の出版件数は韓国が2177件、台湾1206件、中国537件と極めて多いが、イタリアは78件である⁽²⁾。フランスを例外として、アメリカ、イギリス、ドイツなど欧米圏では全般的に日本の児童書の出版件数が減っている。かつて出版された本が絶版になっていることもあり、古書市場を頼っても見つからないことが多い。日本国内の図書館では、国立国会図書館国際子ども図書館が外国語に訳された日本の児童書を収集している。国会図書館のデータベースを使って蔵書検索をしたところ、イタリア語の日本の児童書として41件がヒットした⁽³⁾。この41件には『魔女の宅急便』などの幼年童話も含まれるので、絵本に限ると数はもっと少なくなる。いわむらかずおの『14ひきのせんたく』などはイタリア語にも中国語にも翻訳されていることがわかり、比較検討すると発見がありそうに思われたが、図書館では一冊全部の複写が禁じられている。結局現物を学期中に入手する見通しも立たず、残念ながら当該学生には課題図書として英語版を渡さざるをえなかった。毎年のことであるが、学生向けの公平かつ安定的な選書が目下の課題である。

II

中国人留学生が増えたのにもない、中国での翻訳本に接する機会が増えた。前々から気になっていたのは、中国版にはしばしば付いている解説リーフレットの存在だ。中国語による作品解説は、中国で日本の絵本がどのように受容されているかを考えるヒントになるので、受講生には課題図書の本文に加えて解説の翻訳も課題とした。

例えば、6の『めがねうさぎ』の中国版にも、解説リーフレットが付いていた(図1)。まず、『めがねうさぎ』の梗概を記す。夜、うさぎのうさこが紛失した



図 1

眼鏡をさがしている。おばけは誰かを驚かせようと思ってうさこの前に現れるが、目の悪いうさこはおばけと思わず怖がらない。うさこが眼鏡をかければ自分を怖がるだろうと思ったおばけは、一生懸命眼鏡をさがし、ようやく発見する。見つかった眼鏡をうさこがかけると、太陽が昇り、おばけは消えてしまうという物語である。この作品解説として、著者紹介、読者へのメッセージ、著者への質問と答えなどが掲載されている。リーフレットがなかなか面白かったので、Zhu Jinさんの訳文を私が一部あらためて以下に記す。

Q 中国ではおばけは怖いとされています。この妖怪絵本の見どころを紹介していただけますか。

A 日本の物語では、おかしいおばけのキャラクターが多いです。皆恐いとは思っていません。面白いと思っているのです。だから、日本の子どもはおばけに親近感を持っています。色々なおばけの遊びもあります。中国は長い歴史がある国なので、子供の遊びもいっぱいあるでしょう。日本のおばけの物語を見たまなさんが面白いと思い、遊びが増えたらいいと思います。『めがねうさぎ』と『おばけのてんぷら』にはうさぎとおばけのキャラクターが出て来ます。主人公は、私ที่บ้านで飼っていたうさぎがモデルです。うさぎは弱い動物とされているけれど、うちのうさぎは結構強かったです。それに対して、おばけには怖いだけではなく、弱い面もあります。そこからこの本のキャラクターができました。

本作品にはおばけが登場する。『めがねうさぎ』のおばけも日本的なおばけであり、日本人読者にとっては違和感のない存在であるが、中国の読者に対しては説明があつてしかるべきと考えられたのだろう。日本人は古くから中国の文献を輸入し、中国の怪談や妖怪画なども受容しつつ、十八世紀後半から妖怪を娯楽の対象として扱う文化を作り出した⁽⁴⁾。妖怪をかわいく表現する図像も、江戸期に確立したものである⁽⁵⁾。つまり、日本のおばけは江戸時代から面白おかしい存在者であり、その頃から子ども向けのおばけの絵や玩具なども作られ、現代に至るのである。対して中国ではおばけは怖ろしいものだというイメージが強いため、読者の理解を促すためにこのような質問と答えが準備されたのだろう。このように、リーフレットでは日本人の著者と中国人読者を結ぶ工夫がなされており、異文化を紹介する手立てとして非常に有効と思われた。

7の『くじらだ!』については、解説文の多さに驚かされた。この作品は鳥が「くじらだ!」と叫ぶのを聞いた湖畔の人々がくじらを探し回るが、どこにも見つからない。空を飛ぶ鳥の目で見ると、湖そのものがくじらの形をしているのがわかるのに、人の視点ではそれがわからないという物語である。最後に空から見た大きな鯨状の湖が絵で示され、読者があっと驚くという仕掛けになっている。付録のリーフレットには、三つの解説文が書かれていた(図2)。Deng Yangさんの翻訳に私が手を加えた文章の一部を、以下に記す。

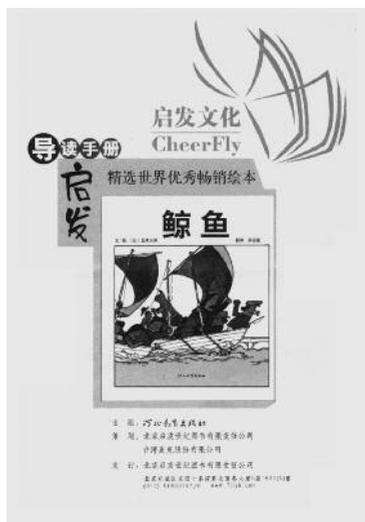


図2

「ああ!なるほど!」

「ああ!なるほど!」ほとんどの読者は結末をみてこうつぶやき、作者の独創性に感服する。五味太郎は日本絵本界の巨匠である。彼は工業デザインの実験を生かし、インパクトのある作品を作り出した。

第18ページ、19ページはランチの一部分で生じた誤解(2尾の小魚の笑顔)、第20ページでは村人のパイプの煙とくじらの吹く潮が同じように見えるという小さなユーモア、外見に頼って真相を判断することの愚かさを批判しているのだ。

「無邪気さの魅力と力」

五味太郎は子供の無邪気さをとらえるのが得意である。女の子と猫は大人たちの対立面である。五味太郎は「弱者に力を与える」という伝統的日本マンガの描き方を継承している。くじらが食べられると主張したおじいさんもまた、小さな存在である。

「真相」

表紙ページに、一羽の渡り鳥が飛び込んだ。書名のページ上では、渡り鳥は海を飛び越えた。物語の始まりで、鳥は既に湖の上空を飛び、それから風見鶏に止ま

る。読者に鳥の飛行時間と速度の変化を感じさせるために、五味太郎は絵の枠をだんだん大きくして、渡り鳥も大きく変化させ、遠くから近くまで来させた。3ページの鳥の着陸場面はまるで映画のワンシーンのよう。

以上少しだけ記してみたが、実際の解説文はもっとずっと長い。解説の分量には正直驚かされた。かような解説は中国ではよく見られ、購買を検討する大人が読んでいと留学生たちは話してくれた。日本で売られている絵本にも著者紹介などを記したリーフレットが付いている場合があるが、ここまで詳細な解説文はあまり見ない。

現代の中国語圏の絵本については、大阪国際児童文学館刊の『論文集 中国の絵本 シンポジウム報告集 中国と日本の絵本』が全体的な見通しを示してくれる。その中で

現在中国で出版される絵本の多くは、作品の創作背景、著者の横顔、作品に込められた思想や意義、教室や家庭での読み方の提案、といった内容が、本にページを加えて印刷されたり、リーフレットとして挟みこまれたりする。この手法は絵本の普及活動で一步先を行く台湾地区から伝来した⁽⁶⁾。

と書かれている。台湾では1960年代から日本の児童文学が翻訳されるようになり、90年代後半になると絵本ブームがおとずれた⁽⁷⁾。前掲の『日本発☆子どもの本、海を渡る』によると、台湾の児童書には保護者や教育者の目線から、どれほど有意義な読み物であるかを強く訴える宣伝が施されることが多いそうで

絵本の宣伝にも同じ傾向がある。例えば、福音館書店月刊絵本『こどものとも』から翻訳された創作絵本シリーズの紹介ページにも、児童文学者や評論家、教育者や大学教授などによる解説や推薦文が掲載されている。

つまり、台湾では、文と絵のバランスを自由に楽しむ絵本の宣伝にも、エンターテインメント性の高い趣味の本の宣伝にも、親へのアピールや教育者・専門家の強い後押しが必要とされ、保護者が期待する「ためになる読書」意識が前面に出てくるのは、台湾の子ども読者の事情を考える際に見逃せない事実なのである⁽⁸⁾。

とある。私たちが授業で扱った絵本本体に付された解説やリーフレットの推薦文なども、台湾伝来の「ためになる読書」意識を前面に押し出した宣伝手法といえよう。また台湾では100を数える本がよく売れること、親が算数に関わる本を好むことが指摘されている⁹⁾。このような実利的な読書意識を親が持っており、絵本を選択する時にも一つの基準としているのであろう。

子どもの読書が「ためになる」という意識は、もちろん日本でもみられる。永田桂子著『絵本という文化財に内在する機能』を読むと、わが国の児童絵本に最初に評価されたのは「教育性」であり、既に江戸期の育児書には読書への入り口になるもの、明治初期には就学の準備になるものと価値づけられていた。現代日本の母親は、絵本の機能として「親子のふれあいができる点」（共有性）を評価しているという¹⁰⁾。つまり、日本にも昔から「ためになる読書」意識はあるが、現代においては親子のコミュニケーションツールとしての機能が重視されているのである。

日本で学ぼうとする留学生の多くは、来日前から日本のアニメーションや漫画に親しんでいる。そのためか、漫画的かつ個性的な作品は、授業でも総じて好評である。漫画的な『くじらだ!』を授業で読み聞かせた時は、最後の衝撃的な絵に皆驚いていた。そして、学期中にこれまでとりあげた絵本の中で、印象に残ったものを挙げてもらったところ、

「いままで何冊も絵本を紹介して下さったが、一番好きなのは五味太郎さんの『くじらだ!』だ。表紙から見ると多分地味なストーリーだと思ったが、意外に面白かった。」(Zhan Yi さん)

「私にとってもっとも気に入った絵本は『くじらだ!』という本です。最初みんなくじらという動物を知らなかったのですから、おじいさんがみんなに説明するところはとても面白かったと思います。喜劇的作用があると思います。」(Wang Yangyang さん)

などのコメントがあった。

このように『くじらだ!』は、一読すれば面白さが十分に伝わるのであるが、娯乐的であるがゆえに、本の価値を権威づける推薦文が中国では必要だったのではないかと思う。授業で扱った宮西達也のユーモアあふれる絵本『カエルくんの

みずたまり』の中国版にも、裏表紙に簡単な解説が付されていた。漫画的なタッチの作品には読書の効用を記して、保護者の購買意欲を促すのであろうか。

教育に役立つような絵本が受けるという一方で、五味太郎や宮西達也、いわいとしおらの娯楽的な絵本は実際に台湾や大陸でも売れているらしい⁽¹¹⁾が、留学生にも好まれる。留学生も絵がかわいくて楽しい作品を素直に評価するが、そのセンスはほとんど現代の日本の子どもや若者と変わらず、日本の漫画やアニメーションの影響を受けているものと思われる⁽¹²⁾。

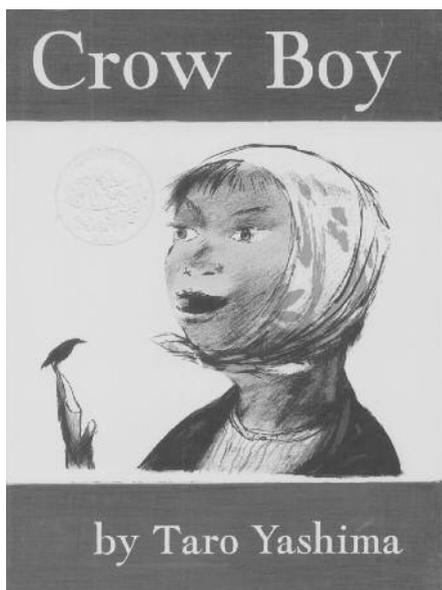


図3

授業ではできるだけ多様なものを扱おうと考えているが、今年度の異色作は『からすたろう』(図3)であった。1939年に渡米した八島太郎(岩松惇1908~1994)が故郷である鹿児島県根占を舞台にした絵本であり、描かれているのは、今の日本では見ることのできない古い昔の風景である。日本人がアメリカで日本を思いながら作った英語の本が先に刊行され、その後日本版が出されたという、特異な背景を持つ。アメリカでコルデコット賞次席、日本でも絵本にっぽん賞特別賞を受賞した、歴史的に評価の高い本であるが、八島の個性的な絵と物語は、現代の日本で好まれるタイプの絵本では決して

ない。感動した受講生もいれば、「好きにはなれない」と率直な感想を述べた学生もあり、好みが別れた作品である。絵本は自由に読まれるものであって、読者が異なる感想を持つのは当然であり、個人的な好みは尊重されるべきである。かわいく楽しい絵本を選ぶと授業の雰囲気が明るくなっていいのだが、日本の絵本の歴史性と多様性に目を向けてもらうためには、毛色の異なる作品を選ぶことも大切であると考えさせられた。今年は科学絵本の例として『ふしぎなたね』と昔話絵本の例として『桃太郎』をとりあげたが、作り手の安野光雅、赤羽末吉は日本の絵本界を代表する画家である。赤羽末吉の絵本『つるによぼう』(矢川澄

子再話、福音館書店、1979年)が中国の日本語教育現場で使われ、多くの中国人学生を魅了した事例も報告されている⁽¹³⁾。古典的な絵本は一見地味に見えても、心に残るものも多い。授業で扱わない限り留学生が読む機会はないと思われるので、古典的作品はこれからも読んでいきたい。

III

絵本には実に様々な動物が描かれているが、留学生と日本の絵本を読んでいると、日本人の生き物観が作品に投影されていることに気づかされる。『くじらだ!』について意見交換をしていた時、イタリア人留学生の Maschio Paola さんが「この本を読んで日本人を怖い人たちだと思う外国人がいるかもしれない」という鋭い指摘をしてくれた。

『くじらだ!』の舞台は、特に日本とは特定できない場所で、五味太郎の絵もことさら日本的な風景を描いているわけではない。どこかのある村の、鯨に関する知識を持たない人々の物語である。一人のおじいさんが図鑑に記された鯨についての情報を伝えると、

みんな びっくり ぎょうてん、こしぬかした。

「おお、こわい」「おそろしい かお」「しおを ふくんだと!」

でも、くじらがたべられるとわかると、きゅうに みんな ゆうきがでた。

「たべられる さかななら いただきだ。なにしろ おれたちゃ りょうしなんだ!」

と皆一丸となって鯨をつかまえに行くのである。つまり、『くじらだ!』は鯨を捕獲して食べたいという食欲の物語であり、その根底には古くから鯨を食用としてきた日本人の鯨観がある。

古くから日本人は食べることを前提に鯨を捕ってきた⁽¹⁴⁾。江戸時代には既に鯨料理の本が書かれており、戦後の食糧難の時代は安価で栄養価の高い鯨はよく食べられた。1962年には22万6000トンもの生産量があり、学校給食の定番メニューであったことから鯨食の経験を持つ日本人は多い。しかし、国際情勢の変化によって1982年に商業捕鯨ができなくなると、日本の捕鯨活動は苦境に

立たされ、現在の鯨肉供給量は最盛期のわずか0.2パーセントに落ち込んだ。そのため、日本では鯨を食べたことのない若い世代がふえている。

環境保護の機運が高まり、世界的な反捕鯨運動が広がり始めるのが1970年代のことである。1978年刊行の『くじらだ!』は日本の捕鯨活動に圧力が加えられていく時期の作品であり、かつ日本人にとって鯨肉がまだ食べ物として認識されていた時代の産物である。鯨の捕獲の是非に関し、国際的な論争、摩擦が起こっている今、捕鯨反対者の視点から見た場合『くじらだ!』は、捕鯨に異常な執念を燃やす怖ろしい人々（日本人）の物語に見えるかもしれない。『くじらだ!』は現在中国語（簡体字版、繁体字版）に翻訳されているが、捕鯨反対国での翻訳紹介は困難が予想される。動物観を共有する国では受容されるが、異なる動物観を持つ人々には違和感を与えらると思われる。

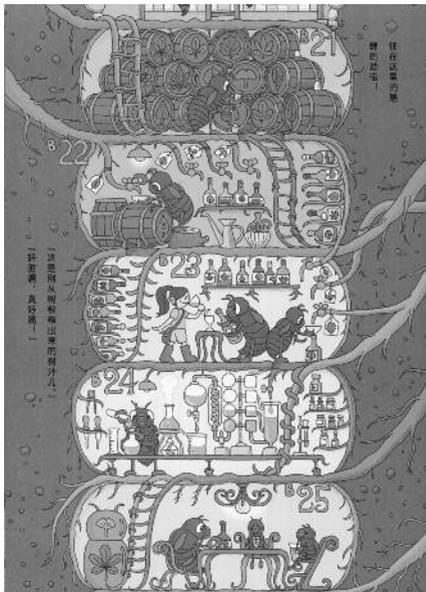


図4

ズ、ハリネズミ、トカゲ、モグラ、カメである。昆虫であるアリ、セミの他、昆虫の定義からは外れる「虫のようなもの」つまりダンゴムシやミミズ、トカゲなどを合わせると、全体の半数にのぼる。試みに『ちか100かいだてのいえ』の前編にあたる『100かいだてのいえ』を見ると、ネズミ、リス、カエル、テン

また、昨年とりあげた『100かいだてのいえ』の続編『ちか100かいだてのいえ』中国版(図4)を読んでいた時、日本人は虫が好きなのではないかという話で盛り上がったことがあった。『ちか100かいだてのいえ』は、お風呂好きの女の子クウちゃんのカメに導かれて不思議な家に遊びに行く物語である。建物の中には10階ごとに異なる生き物が住んでおり、パーティーの準備をしている。この生き物について、翻訳担当者のWu Yangさんは「虫が多い」と指摘してくれた。

『ちか100かいだてのいえ』に登場する生き物は、ウサギ、アライグマ、セミの幼虫、ダンゴムシ、アリ、ミミ

トウムシ、ヘビ、ハチ、キツツキ、コウモリ、カタツムリ、クモが登場する。昆虫であるテントウムシとハチの他、ヘビ、コウモリ、カタツムリ、クモは漢字で書くといずれも虫偏がつく「虫のようなもの」である。『100かいだてのいえ』においても、登場する生き物の半数は虫か虫のようなもので占められる。

この点をどう解釈したらよいだろうか。作者いわいとしおの好みで、虫が多く描かれている可能性はある。哺乳類ばかりを描けば何となく単調になるが、翼を持つものや細長いもの、足の多いものや足のないものなど、異なる形態の生き物を描くことで表現が多様化することも理由であろう。しかし、虫が多く選ばれていることの社会的背景として、日本人の虫好きが影響しているのではないか。

個人の好みはもちろんあれど、日本人は一般的に虫が好きである。小泉八雲は日本の虫についていくつかの文章を書いたが、そのうちの「虫の音楽家」において

日本の家庭生活や文学作品で、虫の音楽が占める地位は、われわれ西洋人にはほとんど未知の分野で発達した、ある種の美的な感受性を証明してはいないだろうか。宵祭りに、虫商人の屋台で鳴きしだく虫の声は、西洋では希有な詩人しか感知し得ない事から一悲喜こもごもの秋の美しさ、夜の妖しく甘美なざわめき、林野を駆けめぐっては魔法のように記憶を呼び覚ます木霊—であるが、これらは日本の一般民衆に広く理解されているということを示してはいないだろうか。

われわれ西洋人は、ほんの一匹の蟋蟀の鳴き声を聞いただけで、心の中にありったけの優しく繊細な空想をあふれさせることができる日本の人々に、何かを学ばねばならないのだ¹⁵⁾。

と述べている。

また、2010年6月20日の『朝日新聞』には、日本人の昆虫愛を映画にした米国人女性ジェシカ・オーレックの記事が掲載されている。彼女は小さい頃から虫が好きだったが、米国には昆虫趣味がなく肩身が狭かったそうだ。2006年に日本の昆虫熱を知って来日し、ごく普通の人々がスズムシとキリギリスの羽音の違いを識別できたり、ホタルを悲恋の象徴とする文学があることに驚嘆した

という。映画監督として『カブト東京』を撮り日本の虫文化をアメリカで紹介したオーレックは、なぜ日本ではこれほど虫が愛されるのかについて「日本の人々は虫たちのはかない生命に美を感じることができる。米市民にはその文化がない」と語っている。

実際、日本の子どもたちはセミ捕りをしたり、セミの抜け殻を集めたり、ダンゴムシやカタツムリをさわるなどして遊ぶ。男児向けのおもちゃでカードゲーム「ムシキング」が売られているのも、虫を遊びの対象とする感覚が根底にあるからだろう。夏休みになると捕虫網や虫かごが売られ、虫の観察が教育的として奨励されることも、日本人の虫好きのあらわれと思われる。

現代の日本で読まれている絵本には、虫を主人公にしたものや、虫と子どもの関係を扱ったものがある。前者の例として、工藤ノリコ『セミくんいよいよこんやです』教育画劇、2004年）を挙げる。地下に暮らすセミの幼虫が地上に現れ、羽化するのを他の虫たちが待ちうけ、パーティーをするという物語である。成虫となったセミくんが「ミーン ミーン、 うれしいな いきているって うれしいな」と生きていることの喜びをうたうところで終わる。オーレックのいう、虫たちのはかない生命に美を感じる感覚がよくあらわれている作品といえよう。

後者の一例は、はたこうしろうの『なつのいちにち』（偕成社、2004年）である。クワガタを捕る少年の夏の一日を描いた絵本で、「虫を捕まえる瞬間の期待と緊張と達成感などなど、幼い日が切なくなるほど懐かしく臨場感を持って伝わってくる」と評されている⁽¹⁶⁾。大人がこの本を読み「幼い日が切なくなるほど懐かしく感じられるのはなぜかと問えば、自分が虫捕りをしたかあるいは虫捕りを楽しんでいた周囲の人々のことなどを思い出すからであろう。そして、『なつのいちにち』に接する子どもは、虫の捕獲が楽しい冒険であることを絵本を通じて知ったり、自分も経験したいと思うだろう。大人にとっても子どもにとっても『なつのいちにち』は、虫を愛好する文化を前提にした作品なのである。虫を飼育する趣味を持たない読者も、絵本を通じて無意識のうちに日本の虫文化を享受している。

矢野智司は『動物絵本をめぐる冒険』において、幼児は動物絵本というメディアを通して、動物と人間との関係を学び、人間とは何かを学んでいると述べている⁽¹⁷⁾。動物と人間との関係には文化の壁をこえた人類普遍的な面がある一

方、文化に規定される面もある。あらためていわいとしおの絵本を眺めてみると、ダンゴムシやセミなど、子どもに好まれる虫たちが次々に登場し、人間と楽しげに交流する様子が描かれる。現実には生きていない虫を気持ちが悪いと思う子どもも、絵本を通じて虫を友達のように感じる。矢野のこぼれ話をかき集めれば、虫の絵本を通じて、子どもは虫と人間との関係を学び、人間とは何かを知るのであろう。

古い時代から日本人は、和歌や物語など、文学を通じて虫への親近感を身につけてきたわけだが、現代においても日本の子どもは、絵本を通じて日本的な虫への愛を知っているのではないだろうか。『セミくんいよいよこんやです』や『なつのいちにち』は虫が主題であり、虫好きの多い国ならでは作品なのかもしれない。海外での翻訳紹介には文化の壁が邪魔をするかもしれない。管見の限り、『セミくんいよいよこんやです』と『なつのいちにち』はまだ外国語には翻訳されていないようだ。

五味太郎の『くじらだ!』は日本の鯨文化を、いわいとしおの『100かいだてのいえ』シリーズは日本の虫文化をあらわしている。このような見方で絵本の動物に注目してみると、さらなる発見があることだろう。そして、これらを通じて日本の生き物文化も静かに輸出されているのである。

IV

授業の最後あたり、学生には「翻訳したい日本の絵本」と題したレポートの提出を課している。留学生は近隣の書店や図書館などで現在流通している日本の絵本から、母国で紹介したいと思う本を自分の感受性によって選び、日本人は自国の絵本のうち外国で紹介したいと思うものを選ぶ。

今年度の留学生たちが選択した絵本の例を挙げる。古典的な作品としては佐野洋子『100万回生きたねこ』、ふるたたるひ作・たばたせいいち絵『おいしいれのぼうけん』など。『100万回生きたねこ』は韓国、中国、ロシアで、『おいしいれのぼうけん』は台湾と中国で翻訳が出されている。最近では日本で話題となった作品がすぐに韓国や中国で翻訳されるケースが増えているが、留学生が母語に訳したら売れるのではないかと考える本が、実際に翻訳されて売られている。その意味で、学生の感覚は鋭く現実的である。

日本人受講生の平島朱美さんは、「大人も子どもも楽しめて、世界でも話題となった日本の生活文化を味わえる作品」として『もったいないばあさん』シリーズを挙げた。真珠まりこ作・絵、講談社発行のこのシリーズは、『もったいないばあさん』から始まり、『もったいないばあさんがくるよ!』などの後続作のみならず、CDブックやカルタなど多くの商品が作られている。平島さんは

本シリーズ中、『もったいないばあさん もりへいく』では、森にある花や草、葉っぱやドングリを使っていろいろな遊びを紹介する。「もったいないばあさんがくるよ もったいないことしてないかい」では運動会、いもほり、冬至など日本の春・夏の行事を中心に、不要品の再利用や人と人のふれあいの大切さを説得力ある絵と言葉で表す。

大量生産・大量消費時代の現代人の生活の中で忘れ去られているものを思い起こさせ、もったいないという言葉を通して、モノや自然への愛情を想起させるとともに、生活を豊かにする工夫はちょっとした努力でできるんだよと、特に先進工業国の人々に投げかけている作品である。欧米諸国や教訓の好きな中国、インドにも紹介されるとよい。

と述べている。『もったいないばあさん』は、作者が息子に「もったいない」という言葉の意味を問われたことがきっかけで作られた絵本であり、ものを大切にする気持ちを伝えるための教訓的な作品である。「もったいない」は2004年のノーベル平和賞受賞者・ワンガリ・マータイが環境にやさしい言葉として国連で紹介した教訓的な日本語であり⁽¹⁸⁾、この語の意味を楽しく学ぶ『もったいないばあさん』は、外国で紹介したい日本の絵本として価値ある一冊と思われた。

なお、講談社からは『もったいないばあさん』の対訳版として、日本語と英語を併記した『Mottainai Grandma』も出ている。カバーに付けられた宣伝用キャッチフレーズには「「もったいない」の精神を、世界に広めよう」と書かれている。本文は

Leftover food on the plate.

Last grains of rice stuck to the bowl.

She will come and say, "Mottainai!"

と英文が記され、その下に小さい字で

おさらの うえの たべのこし
おちゃわんに ついた ごはんつぶ
もったいなーいと いって くるよ

と和文が続く。もったいなないという言葉の意味を教えるという道徳教育のみならず、英語教育にも役立つという、一石二鳥の効果が期待される絵本なのである。

永井雅子は「絵本は本来、読者の楽しみのため作られているものである。しかし、さまざまな性質やジャンルの絵本を数多く教材として活用することは、子どもの主体性を促し楽しみながら学習の幅や興行きを広げる機会となり、別の角度から絵本に出会うことにもなるであろう」と述べている⁽¹⁹⁾。『もったいなないばあさん』シリーズは多様な商品展開も含め、教材絵本の可能性を示している。

授業を行いながら、海外で翻訳された日本の絵本の量、各国での受容状況など、まだまだ知られていないことが多いと実感した。受講生たちが海外で翻訳があったらよいと思う日本の絵本は、もう既に母国で翻訳されており、多くの子どもの目にふれている。今年の4月20日から8月31日まで、神保町の会員制ライブラリーBOOKS ON JAPANで「国境をこえる日本の絵本」展が開催され、約40の外国語に訳された142作、517点が紹介されていた。展示を見ながら、自分たちが授業で行っていることがまさしく現在進行形の出来事であることを実感した。日本の漫画やアニメが外国で評価されていることはよく知られているが、日本の絵本の人気の高さについてはあまり気づかれていない。漫画やアニメは、ひとがある程度成長し、言語を習得してから自分の趣味で楽しむものだ。いわば、自覚的に享受される文化である。それに対して絵本とは、年端のいかない小さい頃に大人から与えられるものである。そのため、ひとは絵本を通じて無自覚・無意識のうちに絵や物語の面白さを知り、教訓をすり込まれる。日本の絵本は、国内の子どもたちだけではなく、海外の子どもたちにも、様々な情報を与えている。小さな外国人読者たちは、ともすれば自分の眺めている絵本が日本のものであることも知らずに、日本文化を享受しているのである。絵本には漫画やアニメと異なるレベルでの文化的影響力があるのではないだろうか。これからも日本の絵本を海外の人々とともに読むことを通じ、日本文化の一つとしての絵本を位置づけ、

考えていきたいと思った。

今年度は課題図書以外の参考図書として、中国の絵本（チェン・ジャンホン作 絵 平岡敦訳『この世でいちばんすばらしい馬』徳間書店、2008年）とイタリアの絵本（イエラ・マリ作『木のうた』ほるぷ出版、1972年）を紹介した。留学生の出身国が中国とイタリアであったので、世界的に評価の高い中国の作家とイタリアの作家の作品を持参したのであるが、授業で印象に残った本を問うた時、翻訳を課された課題図書ではなくこの二書を選んだ学生が複数いた。日本の絵本についての授業で日本の作家の作品でないものが学生の印象に残ったというのは、二書が優れていることによるが、私の授業の限界を示しているとも思えた。語学の勉強のためではなく、絵を眺める方が絵本を楽しむにはよいに違いない。

この出来事から、絵本の絵により注目し、皆で議論し考える必要性を私は強く感じた。『この世でいちばんすばらしい馬』は、フランスで活躍する中国人画家による作品で、中国の伝統的な技法によって描かれた馬が魅力的である。『木のうた』は季節のうつりかわりとともに一本の木がどのように変わっていくかを絵だけで表した美しい絵本だが、ことばを伴わない作品であるだけに、読者が自由に情景を解釈して楽しむことができる。日本の漫画やアニメに慣れ親しんでいる若者は、国籍を問わず漫画的な絵を伴う現代的な絵本のよさをすぐに理解し、楽しんでくれる。だが、絵本の絵は漫画やアニメ以上に多様である。鮮やかな色彩の絵本だけではなく、鉛筆やペンによるものもあれば、版画やコラージュなど様々な原画が使われている。絵本というメディアの多様性に配慮し、様々な作品を扱うことが大事だと考えさせられた2013年であった。

最後に今年度の受講生全員の氏名を記す。

Deng Yang, Ren Haoqing, Wu Yang, Zong Miao, Zhan Yi, Wang Yangyang, Zheng Meiling, 平島朱美, Zhu Jin, Maschio Paola

- (1) 横山泰子「日本の絵本を非日本語で読む」『小金井論集8号』2011年12月、「続・日本の絵本を非日本語で読む」『小金井論集9号』2012年12月
- (2) 国立国会図書館子ども図書館『日本発☆子どもの本、海を渡る』、2010年、21ページ
- (3) http://rnavi.ndl.go.jp/simpledb_search/
- (4) 香川雅信『江戸の妖怪革命』河出書房新社、2005年

- (5) アダム・カバット『江戸滑稽化物尽くし』講談社文庫、2011年『江戸の可愛らしい化物たち』祥伝社、2011年
- (6) 中西文紀子「中国絵本の現状と可能性」『論文集 中国の絵本 シンポジウム報告集 中国と日本の絵本』2010年、大阪国際児童文学館、85ページ
- (7) 前掲『日本発☆子どもの本、海を渡る』27ページ
- (8) 張桂娥「帯の違いからみる台湾の子どもの読書事情」前掲『日本発☆子どもの本、海を渡る』29ページ
- (9) 前掲『アジアの絵本シンポジウム 絵本は国境を越える 中国語圏の絵本の現在』大阪国際児童文学館、2011年、8ページ、高明美発言による。なお、『100かいだてのいえ』の著者いわいとしお（岩井俊雄）は、当時小学一年生だった長女が数の繰り上がりのしくみがよく理解できていなかったのを知り、数字の構造を感覚的にのみこめるような絵本を作ろうと考えたと述べている（岩井俊雄『アイデアはどこからやってくる?』河出書房新社、2010年、21ページ）。
- (10) 永田桂子『絵本という文化財に内在する機能 歴史・母子関係・現代社会からの総合的考察を通して』風間書房、2013年、33～35ページ
- (11) 前掲『中国語圏の絵本の現在』7～8ページ
- (12) 現代の中国の若者が日本のマンガ・アニメをはじめとする日本文化に馴染んでいる現状について、櫻井孝昌『日本が好きすぎる中国人女子』PHP新書、2013年 が参考になる。
- (13) 堀川玉容「民族民話絵本を用いた国際理解の実践Ⅰ 中国56民族民話絵本教室の企画について」『長崎大学教育学部附属教育実践研究指導センター紀要』2号、2000年
- (14) 本稿における鯨食についての記述は、小松正之『日本の鯨食文化』祥伝社、2011年による。
- (15) 小泉八雲コレクション 池田雅之編訳『虫の音楽家』ちくま文庫、2005年、181ページ
- (16) 香曾我部秀幸・鈴木穂波編著『絵本をよむこと 「絵本学」入門』翰林書房、2012年、209ページ
- (17) 矢野智司『動物絵本をめぐる冒険 動物—人間学のレッスン』勁草書房、2002年、239ページ
- (18) ワンガリ・マータイ、福岡伸一訳『モッタイナイで地球は緑になる』木楽社、2005年
- (19) 生田美秋、石井光恵、藤本朝巳編『ベーシック絵本入門』ミネルヴァ書房、2013年、111ページ